

---

# 北高喫茶部の非日常

三田高志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北高喫茶部の非日常

### 【Nコード】

N8875X

### 【作者名】

三田高志

### 【あらすじ】

文武ともに普通レベルの高校に入学した本堂佑介は、冷房完備と言いつつどうでもいい理由で、喫茶部と呼ばれる実態がよく分からない部に入部した。そこから始まる少し不思議で不可解な日常のお話です。

## プロローグ（前書き）

はじめて長編を書きます。

ぜひぜひ読んでほしいと思います。

## プロローグ

いまこの時、目の前で起こっていることは紛れもない現実で、われわれ人類はそれを現実とかリアリティとか呼ぶのだろうが、それがどうしても現実だと思えなかった経験はないだろうか。例えば、遠く海を跨いだ向こうの国でビルに人工物が突き刺さった時には、俺はそれが現実だと思えなかったのだが、それは俺の妄想でもなんでもなく、それは今世紀最初にして最大の事件として歴史に刻まれている。あの時は、リアルタイムで世界のどこかで現実に起こっていることなのに、映画か何かを見ているような感覚しかせず、思えばそれが世界のどこかで起こっているリアルをノンフィクションなのだと思えなかった初めての経験だろう。

世界史の授業中にそんな哲学を述べてしまうなんて、俺の頭がなんだかおかしいことになったんじゃないかと自分でも心配になるのだが、この真夏の暑さが俺の脳みそを溶かしきってもおかしくはないだろう。うん。きっと、そんなことを考えてしまうのはきつとそのせいだろうね。

もしくはあれだ。俺がここ数日の間に経験した摩訶不思議な電波イベントのせいだろう。いや、あんなのを経験したなら、寂しくて死んでしまうハムスターの気持ちもよく分かると言うもんだ。孤独がトラウマになりそうだけ。

とにかく、そんな話をする以上俺は口裂け女とか人面犬とかサンタクロースとか、そんな都市伝説的な何かを信じていたりはしなかったし、存在するなんてこれっぽっちも思っていなかった。だが、その都市伝説の一つが自分の身に降りかかったとしたら、どうなるのだろう。そのくらいは考えたことくらいはある。バーガーシ

ヨップのハンバーグがミミズの肉で出来ていたとしても、それを今までの人生で何度となく食べてしまった以上それが美味けりやそれでいいし、家電製品に壊れるまでの時間が決められているのなら、あらかじめそれを考慮すればいい。なんだかんだ言っつて、そういうのはそもそも起こりようのないことなのだから、考えるだけ無駄だ。

あらかじめ言っつておく。それは俺がその超絶不思議体験を経験する前の考えである。そして、それを経験した以上それは俺にとつては現実であるし、それを共有する仲間がいる以上、連日のように続く真夏日ラッシュでとうとう俺の右脳と左脳がバランスを崩して、俺のパーソナルリアリティが平衡感覚を失ったのでは断じてないと、俺は胸を張れるね。そして、そんな異常事態が起こった時に、人間は往々にして冷静じゃいられないともな。

それが起こったのは、先週の水曜日だ。その日、俺の現実がひっくり返った。だが、実はその前日、元を正せばそれよりもずっと前からもうすでおかしなことになっていたらしい。らしい、というの、いまだにその実感が湧かないからだ。

だから、まずはその火曜日の様子から話すことにしよう。俺が経験した、この国に伝わる、ある都市伝説にまつわるあれこれだ。

火曜日。その日も梅雨明けの茹だるような暑さがうつとうしい一日だった。六月最後の日、すなわち今年一年の折り返しの日であることを祝うように、お天道様が本気を出していらっしやるような、そう、暑さが猛威をふるう今年の夏でも特に暑い一日だった。

俺の通っている一介の公立高校に設備を充実させるような予算があるわけもなく、哀れな俺達一年生は、向こう一年半以上はクーラーという文明の利器かつ人類史上もっとも有益な発明品の一つを使うことを許されていない。というより教室についていないので使えない。まったく、毎年のように学校にクーラーをつけるという公約をでっちあげて当選するというわが校の歴代生徒会長殿は、今まで何をやっていらっしやっただのかを問い詰めてやりたいくらいだ。

だから俺は気温の上がり始めた五月くらいから、文科系の部活に入ることを考え始めた。なぜって？ 文科系部室、職員室、高校三年の教室のある棟は新館で、哀れなわれわれ一年諸君や二年生の教室はそれと対をなすように並ぶ旧館だからだ。新館は新館と名乗るだけに新館で、当時最新の冷暖房完備というわけだ。

それが決め手だった。昼休みだけでも涼みたいという一心で、新館三階の片隅の一室でこじんまりと活動している、喫茶部というものに気がつけば入部していた。あえて言う。喫茶部に入部した目的は、あくまで冷暖房完備の教室で昼休みおよび放課後を快適な環境で過ごしたいという一心でだけだ。そして、すでに放課後を迎えた今日も今日とて旧館二階の一番奥、二年六組の教室から新館三階の一番奥、喫茶部部室までくそ暑い中を歩いてきた。丸一日真夏がも

たらず天然サウナにこもっていたせいで、もうカッターシャツも汗だくだ。

「佑介<sup>ゆうすけ</sup>」

部室の扉をかちやりと開くと、目の前に現れるのは扉に背を向けた大きな、それはもう熊のように大きな食器棚だ。荷物置きになっている、食器棚の左隣りの壊れたロッカーに荷物を置きながら、右から聞こえてきた抑揚のない僂げで小さな俺の名前の音に言葉を返す。

「おう。保奈美<sup>ほなみ</sup>じゃん。お疲れ様」

「お疲れ様」

保奈美は自分で切っているのだろうか、いや、さすがにそれはないと思うが、短めの無造作なぼさぼさの髪の毛、それに身にまとった学校指定のセーラーを揺らすことなく、黙々と目の前の机の上のカセットコンロのさらに上のヤカンから蒸気が噴き出すのを待っているようだ。ロッカーと巨大な食器棚の背中で入り口から通路のようになっている、いま保奈美が湯を沸かしている後ろを通ったら、意外と広めの小部屋の真ん中に椅子が五つ並べられた円卓が仲良さげに並んでいて、俺は保奈美の後姿から一番遠い椅子のほうへまわって、それに腰掛ける。

すると丁度そのタイミングで蒸気機関車の汽笛のような音が部室に響く。それからぼーっと食器棚の表側を眺めていると、

「どござ」

保奈美がお茶を淹れてくれた。そこらのおしゃれな喫茶店では出てこないような、トラディショナルなグリーンティーだ。ホッとな。ありがたい。

「お、ありがとな」

というか、この喫茶部の活動目標って何だっけ。決して喫茶店的な何かをやるような部ではないというのは、二カ月近く籍を置いていれば分かってくるというものだ。まさか本当に文科系部室を一つ占拠して爽快な昼休みと放課後を送ろうと言うのではあるまいな。ちなみに実態がそうなのは黙っていることにする。それが生徒会なんかに知れ渡った日にゃ、廃部にされても仕方がないからな。誰も自ら快適な環境を手放したりはしたくないだろう。

その実態が不明瞭な喫茶部部长、まきの牧野保奈美はと言うと、その小さな体を俺の向かいの椅子にちょこんと座らせて、カタカタと携帯電話をいじっている。こうして見ると、肌は白いし目は大きいし、そのほかの顔のパーツも端正に整っているし、おしゃれすれば相当見違えるはずなのだが、いかんせん彼女にはその気がないらしい。一度、本気の保奈美というのを見てみたいものだ。

「あ」

っと、何の気なしに保奈美を眺めていたら、いきなり彼女がこちらを向いたので、俺は反射的に目をそらしてしまう。やましい気持ちはないのに、目をそらしてしまうのはなぜだろうね。

「じれ」

彼女が言って差し出したのは部活届だ。六月が終わった時点で確

定した部員の名前、学級、その他もろもろを書き込んで、七月第一週以内に職員室に提出しなければならぬ。予算とか活動内容とかいろいろ面倒なものも書かなきゃならぬのだが、そもそもなぜそんなのを提出しないといけないのかと言うと、この喫茶部がどうやら今年できた部らしいのだ。なんつーか、部室が一つ空いてるのを見つけるような目ざとい女がおつてだな……。

「来たわよ！ 保奈美ちゃんと……まだ佑介だけね、見た感じ」

ばたんと勢いよく扉が開く音が響いたかと思えば、その三倍の勢いでがたとロッカーに荷物が放り込まれる音が響き、さらにその五倍の勢いでガタツと保奈美の隣の席に腰掛けるのは、保奈美がいるせいでだいぶ大きく見える、こちらこそセーラー服姿だ。

「少しは落ち着けよな、こっちが落ち着かないだろ」

その歩く異常気象に俺はたまらず声をかけるのだが、

「保奈美ちゃん、何見てるの？ なになに？ へーえ」

そいつは俺の姿が目に入っていないらしいし、声も右から入って左から抜けて行ってしまったらしい。

「おい菜々子ななこ、シカトはねえだろ」

「んー？ 何か言った？」

手嶋菜々子てじまは綺麗に伸びる黒髪の上にクエスチオンマークを浮かべたような態度を取りながらそう返してきやがった。特徴的な釣り目までをも丸くしているが、こつこつのを確信犯というのだろうか

ね。

「いや、なんでもねえ」

俺はため息をつきながら返答する。こいつのペースに巻き込まれるとロクなことにならないというのは、俺がこの北高喫茶部の事務担当にさせられた件で大いに理解している。だいたい、創部した奴が部長とか事務とかやらないって言うのはどういうことなんだろうかね。今度、菜々子の頭から脳みそ引っ張り出して聞いてみたいぜ。

菜々子はそのまま、まるで俺が喫茶部部室に存在しないような素振りで見保奈美と話し込んでいる。真夏の台風と秋の静けさが短いスパンで交互に訪れるような二人の会話の内容に特に興味はないのだが、何となくその光景を眺めていると、恒例のアレが始まる。菜々子はポケットからトランプを取り出して、それをシャッフル。

「保奈美ちゃん、この中から一枚引いてみてよ。また新しい手品を練習したんだからね、見せてあげようと思って」

言われた保奈美は、普通に会話しているときは片時も目を離さなかった青色のクールな携帯の画面から、俺が観察していた限り初めて目を離すが、

「タネが分からないから面白くないわ」

とだけ言うと、また携帯のキーをかたかたと連打し始める。そんなに見ることがあるかね、携帯で。

「えー、それじゃこっちがつまらないじゃない。いい？ 手品っていうのは見せる相手がいて初めて成立するものなのよ。それなのに、

今は他に見せる相手がいないじゃない」

いや、俺がいるだろ。

「あんたに見せるマジックなんて、持ち合わせちゃいないわよ。残念ながら」

それはお生憎様だな。確かにこの女の手品のレベルが度を超えて凄いののは分かってる。菜々子の手品を見てしまったら、テレビ番組なんかでやっているマジックショーもどきなんて、到底見る気はしない。なんてったって、破ったはずの保奈美のサイン入りトランプ。確かハートのクイーンだった。が、いきなり消滅したと思っただとたんに俺の制服の胸ポケットから、元通りの形で出てきたことがあるくらいだ。そんなレベルの人間が洞察力なんか微塵も持ち合わせていない俺を相手にするよりかは、そういった観察眼とか、集中力を要する作業を得意とする保奈美にしか見せたくない気持ち。は、まあ分からはない。あるいは、ただ単に俺と慣れ合う行為自体が嫌なのだろうか。後者でないことを切に願う。俺が特に意味もない願いを唱えていると、またしても喫茶部部室の扉がかちゅつと音を立て、

「みんなっ！ 今日もきたよっ！」

「掃除で遅くなっちゃた」

ああ、やっと俺の癒しの時間が到来だ。このお二方には、毎日心を癒してもらっている気がするね。特に後者の声ときたら、もう声を聞いただけでも俺の胸の内は海洋深層水のように澄み渡ってしまっうね。

菜々子ほど騒がしくもなく、保奈美ほど静かなわけでもないテンションで、二人は図書館に並ぶ本棚ほど大きな食器棚の裏から、きやぴきやぴと楽しげに姿を現す。

「華奈あ、待ってたぞー」

「お兄ちゃん、大げさだよ」

ああ、我が妹よ。君はなんて可愛いんだ。十年ぶりの再会を宥めるようなその口ぶりも、俺の耳には甘美な響きだ。

「おおっ！ 相変わらず佑くんは華奈っちラブなんだねっ」

「滝ちゃんね……これはもうラブとか言う次元じゃないわ。はつきり言っつてシスコンね。華奈ちゃんも大変ね」

「うっん菜々子ちゃん、私は大丈夫だよ。もう慣れっこだし」

慣れちゃだめだと思っつわ、と菜々子がつぶやいた気がするが、構わず俺は続ける。

「さすがは我が妹だ。それにな滝、俺はシスコンじゃねえ。兄として、妹を可愛がってやるのは当然のことだろう？」

俺は保奈美よりもさらに小柄な喫茶部の元気印、新垣滝あらかきに質問を投げる。学年で一番可愛いと評される彼女と話していると、我が双子の妹、本堂華奈未満ほんどうとはいえ幾分かは癒されるといふもんだ。

「おおっ！ 佑くんはきちんと妹をちゃんと可愛がってあげられる、まさに理想のお兄さんなんだねっ！」

「だからそれは溺愛だっつーの……気持ち悪」

「まあまあ、私は困ってないし、大丈夫だよ。本当に慣れてるの」

二人がやってきて急に騒がしくなった教室を落ち着かせるのは、いつも愛しき華奈の役目だ。あきれた様子の菜々子に華奈が話しかけながら、俺と菜々子の間の椅子に掛ける。その向かい、保奈美と俺の間に滝が掛けたところで、

「それより、新しい手品とかあったら、見てみたいな」

華奈がそう菜々子に言う。

「そうね、あるわよ。滝ちゃんも見る？」

俺は見ちゃ駄目なのか。

「見たけりゃ勝手に見ればいいじゃない。シスコンって馬鹿なの？」

「それ、言いすぎよ」

一応部長の自覚はあるみたいで、保奈美は菜々子の発言に携帯から目を離さずに横やりを入れる。それにしても保奈美、お前はもう少し人と話す社交性を身につけないと、この先苦労することになると思っぞ。

「そうね。悪かったわ、とでも言えばいいかしら」

申し訳ございません、もうしません、どうかお許してください、く

らい言ったらどうだ。そんないらんことを考えていると、

「ねえねえ菜々っこ、早く始めてよっ!」

じれったい様子で滝が駄々をこね始めた。なんつーか、ストレー  
トに可愛いんだよな、この人。やることなすこと全部が世界レベル  
で可愛いね。華奈が宇宙レベルで可愛いからかすんで見えるだけで

「そうだったわね、ごめんごめん。それじゃ、この中から一枚選ん  
でみて」

「じゃあ……これかな?」

そう言われて五十二枚の中から幾分迷いながら華奈が一枚を取り  
出すと、今度は滝のほうに残る五十一枚を差し出す。

「むむむ……じゃあこれっ!」

わが校のアイドルがその中の一枚をヒマワリの種を手取るリス  
のように取り出すと、今度は残りの五十枚が保奈美の前に差し出さ  
れる。

「パス。あなたならできて当然だもの」

確かにその実力だけは認めてやってもいい。

「あら、本当にやらないのね。まあいいわ。ほら。仕方がないから  
あんたが取りなさい」

脳内で保奈美の意見に賛成していると、目の前に五十枚が差し出

される。

「早くしなさいよね」

「じゃあ……これだな」

クラブのエースだ。クローバーとも言う。

「……あんた達って、どうしても認めたくないのに二人が双子だつて実感する瞬間があるわね。華奈ちゃんが可愛いから言いたくないけど、顔だつてそっくりだし、トランプ差し出された時の反応とか仕草、毎回びっくりするわ」

華奈が可愛いのは当たり前だ。言われなくても分かっている。俺フィルターが掛かっているだ？ まあ、確かにそうかもしれないのだが……ただ、その可愛すぎる我が妹のせいで自分が若干女顔なのは、実は少しコンプレックスである。

「ほんとにそっくりだよねっ！」

「まさに遺伝子レベル」

三人が思い思いの感想を述べるのだが、俺は特に意識したことがないのに毎回気付かされる。というか保奈美、お前はいつも携帯の画面しか見ていないはずじゃないのか。

「そうかしら？ 私は意識しないな。お兄ちゃんは？」

「俺もだな」

他愛もない話をしながらそのカードを記憶にとどめると、

「じゃ、回収ね」

と言って配った三枚を集めるや否や、それがふつと菜々子の手から消え失せる。まあ、こいつならこのくらいのは平気でやるから、別に驚きはしない。これを飽きが回ると言うのだろうが、腕が腕なのでこちらも毎度参加してしまうわけである。そのマジシャン風情からは歓迎されないがな。

「どこに消えたんだろうね」

「ああ。今度はどこから出す気だよ」

「ちよつと！ 先読まないでよね。術者に対して失礼よ」

なぜ我が妹には不平不満の一つもないのだ。まあ、言ったら言っただ俺が絶対に許さないんだがな。

「あつ！ すごーい」

滝がかわいらしい指で差した先、すなわち天井。俺の脳天の延長線上に、クラブもといクローバーのエースが、ハートのジャック、スペードのキングとともに仲良くくっついてた。まったく、毎回よくやりやがる。

「お前を見てると、ほんとに意味不明で不思議な力を持ってんじゃないかって心配になるぜ」

「何それ？ 褒め言葉？ それとも文字通りあたしが人間じゃない、

怪物だとも言いたいのかしら」

そういう菜々子の顔は嬉しそうに輝いているんだがな。素直に喜んだらどうだ。そうしたら、俺の好感度ゲージも次第に溜まっていくというのに。だってあれだぞ？ お前の顔面偏差値だってなかなかのものなんだ。その性格さえ直せば、寄ってくる男が後を絶たないだろうさ。

「でも、本当にタネがあるんだよね。どうやったらこんなことできるんだろう」

「やっぱり菜々っこは凄いねっ！」

「ま、日々の精進の賜物ね」

えっへん、と言わんばかりの勢いで菜々子が胸を張る。毎度ながら物寂しさを感じる胸だ。ついそこを見てしまうのは、思春期真っ盛りの男性諸君なら気持ちを分かってくれるだろう。分からない奴は漢じゃないね。

## 001 (後書き)

とりあえず書き貯めていた分は投稿しようと思います。それ以降の更新は週に一回くらいのペースでやりたいです。

こんな感じで、その日の放課後というのは特に何もなかったように思う。菜々子によってマジックショーが開催され、滝は相変わらず学校の、そして我が喫茶部のアイドルであり、俺は華奈を見て、会話することで癒される。その輪に入るとも入らないとも分からぬ距離感で保奈美は携帯をいじり続けていたように思う。

そのまま特筆すべきことは本当に何もなく、夕暮れとともに俺は半生を共にしてきた双子の妹と一緒に自宅に戻った。中学に入ったころに越してきた、まあ良くある最近の一軒家といったいでたちだ。玄関から鍵を開けて上がり込み、

「ただいまー」

と俺が言うと、

「ただいま。お兄ちゃん、おかえりー」

と並ぶようにして家に入った華奈が続く。

「あ、お兄ちゃん。今日のご飯何がいい？ 今日、お母さんたち帰ってこないでしょ？」

言われて思い出した。齢四十半ばにしていまだにラブラブな我が両親は、確か父の有給が取れたとか言いだして旅行に出たのだった。それは俺にとっては願ってもないことで、愛しの我が妹と二人で夜を明かせるなんて考えただけでも胸が熱くなるっもんだ。……引くな。別に俺はそんな危ないことは言っていないだろう？

「そうだな……お前の料理なら、何でもおいしいんだけどな」

「じゃ、納豆巻きでも食べる？」

それは俺がこの世で一番嫌いな食べ物だ。納豆がこの世に存在する意味が分からないね。腐った豆を食べると言う行為はいかがなものかと、俺は声を大にして言いたい。

「華奈、分かって言ってるだろ」

「うん。何でもおいしいって言うから、つい」

ペロツと舌を出して言うのは、先の菜々子とは比べるまでもなく可愛くて、また比べるなら鉛筆の芯とダイヤモンドほどの差があるだろうね。

「納豆、おいしいのになー」

「いくらお前がそう言っても、悪い。俺には無理だ」

「私が言っても駄目かー。お母さんにね、ためしに言ってみてって言われたんだけどね」

だろうな。お前は俺に限らず、人の嫌がることはしない優しい子だ。これは俺がひいき目なしにそう思うところだから、きっとそうなのだろう。俺のことを誰よりも華奈が分かってくれる以上、俺もそうありたいしな。

話しながら、俺と華奈はキッチン付きのリビングにやってくる。部室のとは違う、リビングの真ん中の四角いテーブルに備えられた

木製の椅子に座って、その向かいに華奈が掛ける。机の上のリモコンを華奈の後ろ、狭い庭の除く戸の右側の壁の上のクーラーに向けてボタンを押すと、しばらくしたら涼しい風がそこから噴き出してくる。

「それで、晩御飯何にしよっか？」

不思議なものを見つけた子犬のように首をかしげながら問いかける華奈に、

「ハンバーグがいいな。それがカレー」

菜々子には絶対に出さない、保奈美にも出さないだろうな。というか滝にさえ出したことのない優しい声で返答する。

「じゃ、ハンバーグカレーにしよっか」

「材料はあるのか？ ないなら買ってくるぞ」

「見てみるー」

言っと妹は俺から見て左のカウンターキッチンへとてくてく歩き、冷蔵庫を開く。

「大丈夫みたい」

冷蔵庫から取り出した麦茶を、部室のそれより小さいがそれでも大きめの食器棚からガラスコップを二つ出して、それに注ぎながら言う。

「はい、お兄ちゃん」

「サンキュ」

俺はテーブルに隣接するカウンターに出された麦茶に手を伸ばし、それを一気に飲み干すと、

「じゃあ俺は風呂沸かしてくるわ」

何もしないのは愛しき妹に申し訳ないというものなので、俺はそう申し出たが、

「いいよー、私が沸かしてくるよ。お兄ちゃんは、ここでゆっくりしててね。それに、部活届書かないといけないんでしょ？」

あ、そうだった。俺の後ろの扉から風呂に向かって、てくてくと駆けて言った妹を見送りながら、足元に置いていた学生鞆からその紙切れを取り出す。

取り出して思う。なぜ俺がこの大事な用紙に喫茶部の活動指針だとか、部員の名前だとか、今年の予算だとか言ったものをご丁寧に記入したうえ、来週の頭までにこれを提出せねばならんだ。こういうのはこの部を作ろうと言いだした菜々子か、部長である保奈美……いや、保奈美だって半ば強制的に部長にされていたな。ということは、やはり菜々子がこれを記入してしかるべき対応を行うべきではないのか。無責任な平部員に憤りを感じていると、風呂場から愛しき我が妹が戻ってくる。

「あ、お兄ちゃん。それ、けっこう大変そうだよね」

戻ってくるなりキッチンに入り、ハンバーグの材料を取り出しながら妹がそう声をかけてくれる。ああ、妹よ。お前はどこぞやの喫茶部員と違って優しい奴だなあ。お兄ちゃんは嬉しいよ。そんな子に育ってくれてさ。

「やだなー、恥ずかしいよ。それに菜々子ちゃんはそんなに悪い子じゃないよ」

「いや、あいつは喫茶部の癌だ」

「そんなこと言っちゃ駄目だよ」

「すまん。ごめん。だから嫌いにならないでくれ」

「大丈夫だよー」

キッチンに戻った妹と雑談しながら、部活届に筆、もといシャーペンを走らせる。部長……保奈美は……牧野保奈美か。会計……これは俺のことだな。本堂佑介つと。部員は……本堂華奈、新垣滝、手寫菜々子。そうして俺は書類を記入することに集中し、その間華奈も料理に熱中していたのだが、キッチンから響くそのテンポの良い包丁の音が止まったころ、俺は思い出すことになる。そうか。これがあった。俺はこれがいまだによく分らないんだ。

「なあ、華奈」

「なあに、お兄ちゃん」

言葉を投げると、妹はハンバーグをこねながら返答した。

「うちの部の活動指針ってなんだ？」

俺は本当にこれが分からないのだ。さっきも言ったことだが、まさか昼休みと放課後に冷房の効いた部屋で駄弁るだけの部、なんて言おうものなら、生徒会から部としての許可は下りないだろうからな。それどころか俺達にあの部屋は二度と使えなくなるだろうね。

「うーん……確かに私たち、放課後に駄弁ってるだけだもんね。菜々子ちゃんの手品見たりしてさ」

「そうなんだよな。もう出まかせ書いていいかな」

「出まかせかあ……それはよくないと思うよ。いろんな銘柄のコーヒーや紅茶を集めて、堪能するってことにしたらどうかしら。保奈美ちゃん、けっこういろんなコーヒーや紅茶、持ってきてるし……」

それは屁理屈というんだぞ、我が妹よ。

「もう、お兄ちゃんの意地悪……」

「す、すまん！ 嫌いにならないでくれ！」

不覚にも声に出してしまったらしく、ぷく、と頬を膨らませた妹に俺は本気で謝ってしまう。だって妹大好きだもん。シスコンで何が悪い……って何言ってるんだ？俺はシスコンじゃねえ。シスコンじゃなかったはずだ。シスコンじゃ……。

「でも、それが一番部の活動としては言いやすいと思うよ、私は」

こねたハンバーグをフライパンに乗せながら、華奈が言う。

「確かに……そういうことでいいか」

「屁理屈だけどね」

「華奈も意地悪な時あるよな……」

「えへへー」

そのいたずらっぽい笑顔は俺の癒しです。本当にありがとございます。

……なんてアホなことを考えているのもつかの間、俺はまた部活届と向かい合い、その上にシャーペンを滑らせる。結局その活動内容欄には、華奈の言っていたことをアレンジして、当たり障りのないことを書いた。

そうしてまたこの書類に必要な事項を記入する。記入事項多すぎる常識的に考えて、ことに集中していると、隣のキッチンからいい匂いがしてくる。

「ハンバーグ、美味そうだな」

記入をいったん止め、妹の顔を見て俺は声をかける。

「うん。うまくいったみたい。ちょっと待っててね。もうすぐ全部……」

裏返すよ、という華奈の声が聞こえたか聞こえていなかったかは覚えていない。ただ、そういうことを言ったのはどうやら事実で

あるらしいし、言われてみればそう言っていたような気もする。ただ、俺は華奈がそう言った記憶を持ち合わせていなかった。

さて、俺が覚えているその火曜日の様子というのは、こんな感じである。別段変わった日常であったわけでもないし、おかしいことがあるとすれば俺がこうして愛しき妹、本堂華奈の話を聞いているにもかかわらず、いきなり強烈な睡魔に襲われ、意識を手放してしまっただけである。でも実は、俺が生まれるよりもずっと前からその火曜日までの時点で俺の知らないところでは不思議が渦巻いていて、北高喫茶部の非日常は確かにそこにあっただのだ。

俺がそれを知ったのは、翌朝全てが起こってから、何時間も後のことだった。

暑い。とにかく暑い。ひたすらに暑い。

俺は暑いというその感覚だけで眠りから目覚めた。何という最悪な寝覚めだ。どうやらカッターシャツの制服のままリビングの机で寝てしまっていたらしい。右上を見上げるとエアコンは停止しており、俺はというと全身汗でびっしょりで、かなり気持ちが悪かった。

……と、ふと昨日の出来事に思いを巡らす。……しまった！俺は妹特製のハンバーグ&カレーを食べていないではないか！とつさに俺はそれが用意されているであろう、キッチン奥の冷蔵庫を開く。しかし、そこに俺の期待したものはなく、むしろ冷蔵庫の中身はすっからかんになくなっており、しかも冷蔵庫の中が全く冷えてなかったことに、俺は違和感を覚える。

はて。今俺の住んでる地域では停電か何かが起こっているのだろうか。華奈にでも聞いてみるか。そんなことを考えながら、俺は玄関のほうの階段から二階に上がり、妹の部屋の扉をノックする。

「華奈、入るぞー」

扉を開き、またしても違和感。それもかなり嫌な違和感だった。なぜって？ それはそこに我が愛しの妹がいなかったからだ。華奈は、決して俺に何も言わず出かけたりはしないし、そういう時は大体書き置きをするか、メールを送ってくれるのだ。って、メールか。

そう思つて制服のズボンから携帯を引つ張り出すが、携帯の電波は一本足りとも立つておらず、圏外の文字が表示されていた。同時に時間を確認してみると、水曜日の、まだ朝の八時だった。

ふむ。いよいよ何かがおかしなことになっているようだ。まあ、どうせこの北高周辺の一帯が停電になつていて、華奈はびっくりして近所の誰かのところに出かけているのだろう。俺はそう認識してキッチンの蛇口をひねる。すると、湯は出なかったが、水は出てくれた。後ろの食器棚からコップを取り出し、水をグイッと一気。あれこれ考えるのも面倒だ。暑いし、せつかくだから水風呂にでも入るか。それにこの非常時、学校だつて行く気にもならないし、授業もないだろう。俺はそのまま風呂場へと向かった。

これだけ暑いと水風呂というのは結構気持ちいいもので、長湯ただし湯ではなく水　してしまつたのだが、一向に妹が帰ってくる気配がないし、電気が復旧する気配もない。それは風呂から上がつて一時間が経つた現在、午前十時になつても変わらなかつた。俺はいよいよおかしなことになつたと感じていて、さすがにもうじつとしていられず、風呂上がりから小一時間の時をむさぼつたりリビングの椅子から立ち上がり、そのまま青のＴシャツにグレーの半パンという寝巻スタイルで家から出た。

出てびっくりした。

俺はその光景が現実のものだとは思えなかつた。光景と言うより、雰囲気と言つたほうが正しいかもしれないが、俺がこの話の冒頭で話したような、現実を現実だと思えないような不思議な感覚が、俺を襲つたのだ。

なぜなら、家から一步出た瞬間、耳をつくような蝉の声、人々の生活音、例外なく吠えてくる隣の家の犬の声、自動車が走る音、そういった音という音の全てが全く聞こえて来ず、静寂の世界が広がっていたのだ。さんさんと照りつける真夏の太陽だけがこれが現実であることを告げていたが、その言葉では言い表しがたい物々しい雰囲気は、今この時この世が何かおかしなことになっていると俺に告げていた。

とにかく誰かに会おう。俺はそう思うと、気付けばその犬の飼い主が住む隣家の門、そのインターホンを押していた。普段ならこの時点でしつけの悪い犬が客を暴漢か何かを追い払うような勢いで吠えつけてくるのだが、それすらもないのがさらに不気味で、俺はちらつと門の左側の犬小屋のほうをのぞいてみる。案の定、そこに犬はいなかった。

俺は混乱し始めていた。華奈だけでなく、隣の家の住人、しかもその犬まで朝から出かけてしまっているなんて聞いたことがなかったのだ。隣人は犬をほぼ放置していたし、さっき言った通り、まず何より華奈は俺を心配させるような真似をするはずがないのだ。一体何が起こっているんだ。俺の頭の中は、その思考に支配されつつあった。

その容量が大幅に圧迫されつつある俺の脳みそをフル回転して得られた答えは、とりあえず最寄りのコンビニに行ってみることだった。さすがにコンビニにさえ行ってしまえば、誰かいるだろう。ましてこの電気が使えない非常時に、コンビニに人がいないはずがないと、俺は足りない思考領域をぐるぐるにぶん回して、そこに向かうことにした。それに、最寄り、と言ってもそこまで歩いて十分ほどの距離がある。歩いている間に誰かしらには会っだろうと、俺は

その高をくくって、コンビニースと向かった。

結論から言う。その考えは甘かった。俺は必死に走った。必死になつたのは、本能的に俺が今かなりまずい状態にあるのがなんとなく分かったからだろうし、誰でもいいから人に会いたかつたからだろう。だから、コンビニまで走っている間も、自分の周りの光景を見ながら、必死な割には冷静に走っていたと思う。

結局誰にも会うことができず、俺はコンビニに到着した。停電中である。自動ドアの前に立つてもそれは開かないし、コンビニの中に誰かがいるかどうかを確認するのも、逆光になっていて見づらい。俺はコンビニの開かない自動ドアの前に立ち尽くしていた。なぜか考えてみてほしい。このころになると、さすがに俺の頭の中に、ある仮説が立ち始める。その仮説はこうだ。

世の中の人間が、俺を残してすべて消えてしまった。

だから、電気が流れない。だから、道中誰にも出会わない。だから、隣人が家にいない。何よりも、だから華奈がいない。考えるとぞつとしたね。だから、その考えを否定するためにも、人が絶えることが滅多にないと考えられるコンビニに、誰もいないという状況は避けたかった。避けてほしかった。そう考えると、俺はそれを確かめるための一歩、あかない自動ドアをこじ開けるといふ行為をするまでに、そこに立ち尽くしてから五分は要したと思う。本当はもつとかかっていたかもしれないね。

やっとの思いでコンビニのドアをこじ開けると、案の定。そこに

は誰もいなかった。いよいよその仮説は正しいんじゃないかと、俺の脳は告げていた。

「すいませーん……」

音のない世界に俺の声だけが空しく響く。俺の脳がはじき出した仮説を認めたくない一心で、念のためレジまで歩いて控室のほうに声をかけてみるが、返ってくる声はなかった。

いよいよまずいと思った。気がつくど街じゅうを走り回っていた。誰かを探して、誰かに会いたくて。誰でもいい。誰かこの世界にいてくれ。残っていてくれ。というか、これは悪い夢じゃないのか。悪い夢以外何物でもないんじゃないかと、頭の中はその思いだけでいっぱい、華奈に会いたいなんて考える余裕もなくなっていて。とにかく人生で一番混乱したと思う。そして、誰でもいいから人間に会いたいとこれほど必死に願ったのも初めてだった。それほど必死になっていたと実感したのは、いつの間にかお日様が傾き始めていたのに気付いた瞬間だった。

自分の居場所って大事だなと、ふと場違いなことを考えた。夕方になって世界がおかしくなると実感して、半ばあきらめた気持ちで帰ろうと思ったときに、誰もいなくなってしまったその世界には俺の帰る場所などなかったのだ。家に帰ろうにもそこに誰もいないのはもう分かっていたし、いつも通っているコンビニにだって誰もいなかった。俺が一番心の安らく、華奈や他の喫茶部員がいるあの部室にだって、誰もいないのだろう。そう思いながらも、俺はいつの間にかその部室の前で足を止めていた。自分が部室にたどりつくまでに歩いてきた、走ってきた道のりが思い出せないのは、それほど切羽詰まっていた証明だろう。

部室のドアノブを握って、また俺は立ちつくしてしまふ。コンビ二の前に立ち尽くした時とは違う思い、もうあいつらに会えないかもしれないという漠然とした思いがふと俺の頭の中に立ちのぼり、俺は頬に一筋の水滴が垂れるのを感じる。

「ちくしょう……」

つぶやくと同時に扉を開く。佑介、と呼ぶ抑揚のない声は返ってこない。もちろんコンロの前に、その声の主が立っているわけもない。熊のように大きな食器棚の裏からコンロの前を通って部室の円卓を見ても、並んだ椅子に座ってトランプのマジックショーをする姿もなければ、それを楽しむ学園のアイドルもいないし、我が妹の姿もない。言ってしまうえば、この世界から誰もいなくなってしまうという事実を事実として認識したのは、この誰もいない部室を眺めた時だったかもしれない。それほどこの夕暮れの時間帯に喫茶部部屋に誰もいないという事実は、俺にとって重たかった。その重さにやられてしまったように、俺は円卓に並ぶ一番手前の椅子に手を掛け、どかっとな腰を下ろした。

## 005 (前書き)

少し間が空いてしまいましたすみません。

これからもゆっくりと更新していきますので、よろしくお願いいたします。

夕焼けの空が次第に闇に染まり始めた。俺はそのままずっと椅子に腰かけ、途方に暮れていた。途方に暮れることしかできなかったというほうが正しいかもしれない。一日走り回ったせいで足は棒のようになっていたし、俺のメンタルもかなり削られた。もうこの誰もいない世界で、誰にも知られることなく死んでいくんだと、そういうことまで考え始めてしまっていたと思う。そんなときに、大きな食器棚の裏の扉が開く、かちやりという音が部屋に響いた気がした。

最初は気のせいだと思った。俺は下手に物分かりがいいらしく、もうこの世界には誰もいないんだと決め込んでいたのだ。だから、誰かに会いたいという、もう叶わないであろう切実な願いが、俺の頭の中にその音を勝手に響かせたのだと思った。

でも、その音を聞いて振り返ってみると、そこには見慣れた小さな姿があった。見間違えかと思ったが、俺はそのかわいらしいでたちを見て、たまらず声を漏らした。

「滝……なのか？」

そこには我が喫茶部のアイドルにして学園のアイドル、新垣滝の姿があった。

「佑くんごめんねっ！ まさか、キミまでこの世界に来てるだなんて、私思わなかったのだよっ」

ああ、良かった。滝の声を聞いて思う。この状況にふさわしくな

いほどに元気な滝の声は間違いなく新垣滝本人のものであったし、知り合いに会えてよかったという安堵も入り混じって、そして彼女が最初に言った言葉を頭の中に反芻する。誰かに会いたいという念願が叶った割には、冷静だったと俺は思うね。

「……はあ。よかったよお前がいて。俺一人ぼっちになっちまったかと思っただぜ……で、ごめんってどういうことだ？　そもそもこの世界ってなんだよ。俺ら、何か不思議な世界にでも来ちゃったとか言うのか？　だいたい、別の世界に来た割には家とかコンビニとか学校とか、俺には見慣れた世界ばかりだったぞ」

大きなため息を引き金に、今日初めて会った会話の相手に思いつきり声をぶちまける。質問したところで彼女がそれにこたえられないという保証はなかったが、それでもあふれる言葉を抑えることができなかつた。

「んとね、んとね……まず、私たちの置かれた状況から説明するってことでいいかなっ？」

「説明できるのか？　この状況を？」

質問しといてこの返答とは、なかなか失礼なことをしたと我ながら思っ。

「キミが聞いたんだよっ！　少しは信頼してくれいっ！」

ぴしつと俺を指さして言う仕草もかわいらしい。そう思えるくらいに俺の精神はすでに回復していたらしい。まったく、友達パワーって素晴らしいね。

「説明できるよっ！ その前に、佑くんにどうしても信じてもらわないといけないことがあるんだよね」

滝はそれに、俺には到底理解できない言葉を続けた。

「それは、この世には魔法とか超能力とかかっていう不思議な力が存在するってこと。それを知ってもらわないと、説明できないんだよっ」

「ごめん、俺そついうの無理」

「ひどいっ…」

がーん、と効果音が出そうなくらいにがっかりした様子の滝に、俺は言う。

「どうせあれだろ？ そついう魔法とか超能力とか都市伝説とか、そついうのをてんで信じない俺を一泡ふかそつうってことで、俺のまわりそつうな地区の人間とかと協力して俺をひっかけようってことだろ？ まあ、さすがにひやっとしたけどな、ここで滝が出てきたことで全部分かつちまつたんだな、これが」

「違うよ。そんなのじゃないもん」

見たこともないような真剣な顔で滝が言う。それを見て、俺は内心ビビってしまう。さっきドヤ顔で俺が放ったセリフは、確かに半分は本心だが、半分はこの状況を認めたくないという自己防衛の意味合いも含まれていたからだ。ここでそんな不思議がこの世の中に存在するなんて言われたら、俺達が本当に別の世界、誰もいない世界に飛ばされたっていうことも、実際に起こりえることになってし

まう。俺は、それが怖かった。

「…………お、お前、魔法とか使えるのか？」

だから、俺は滝に聞いた。これが壮大なドッキリなのか、はたまた実際に現実として起こっていることなのかを確かめるために。答えはこうだった。

「私、超能力なら使えるよ。千里眼って言って、遠くの物とか人とか景色とか、見ることができるんだ」

…………信じられるか。信じられるわけねえだろ。本当にそんな力が存在するなんて、言われても信じられない。俺の頭の中はそれだけで、つい沈黙してしまふ。何分ほどの沈黙があっただろうか、次に口を開いたのはまたしても滝だった。

「うーん…………どうも信じてくれてないって顔だねっ。男の人にこれを信じさせるのは簡単なんだけど……………なんというか……………その……………」

なぜこの状況でモジモジしだすんだお前は。

「だって、この方法は菜々っこが教えてくれたんだけどねっ、…………えつと……………わたし的にはすごく恥ずかしいんだよっ」

「恥ずかしいとか言ってられる状況かよ。この状況が夢じゃないとしたら、まずいことになってるんじゃないのか？俺だって超能力とかそんなのは信じたくないけど、本当にそうなのなら今実際にそれが存在するのか証明してくれ」

「うー……………わ、分かったよっ……………」

滝は相変わらず恥ずかしそうに言うと、目を閉じる。そして滝が両手を両耳にかざして何かぼそぼそと呟くと、手をおろしてまた恥ずかしそうに目を開く。

「い……妹コレクション……」

「はあ？」

何を言い出すんだお前は。

「佑くんの部屋のベッドの下のねっ……枕元の隙間から手を入れるとそこに隠されてる本……」

うん。なんでお前がそれを知っている。その手の「本」の隠し場所は健全な男子高校生のトップシークレットだ。世界が滅亡するスイッチの前でその隠し場所を教えろと脅されても、俺はスイッチを押すほうを選ぶね。そのぐらいその手の「本」の隠れ家は企業秘密だ。

「まさか……本当に佑くんがシスコンだったなんて、私はショックなのだよっ」

言い返せん。というか、なぜあれの場所が割れたんだ。親父にも見つけられたことなかったのに。

「だからっ、私には分かるんだよ。こうやって、目を閉じて見たいものを見ようとすると、十キロくらい先までなら何でも見えるんだよっ」

本当にこの世に存在する力なのか。その千里眼という力が。やはり俺にはそれが信じられない。だが現に滝は、俺の誰にも話したこともなく、見つかったことのない「本」のありかを、彼女は知っていた。……と言うより今見たらしい。いや、それにしても信じられない。だが……

今は信じる、信じないが問題じゃない。

そう思った俺は、滝に問いかけた。

「俺達の置かれた状況について、知っていることを教えてくれ」

「信じてくれるんだねっ！　ありがとうっ！」

未だ信じきったわけじゃない。だが、ワラにもすがる思いで、っという言葉があるならば、こういう感情のことを言うのだろうね。

「それじゃあ説明するよっ。私たちの置かれた状況が何なのか、っというのは、ほなみんなが必死で調べてくれてるよっ。ほなみんなのところは、魔法連合の中でも有力な家柄だから、家にはたっくさんの魔法書が置かれてるんだよっ！　で、菜々っこは菜々っこでね、いろいろ調べてたみたいんだけど、今はほなみんなの家と一緒に魔法書のチェックだよっ」

なんだ。結局、何が起こったか、というのはまだ分かっていないと言っわけか。

「そう言わないでよねっ！　魔法に関わってきた私たちでも、私た

ち以外の人間が佑くん以外全部消えるなんて非常事態なんだからっ。これは私がさつき見たことなんだけどね、この世界には本当に佑くん以外の人がないんだよっ。逆に言えばねっ、他に困ってる人がいるかな、なんて思っ人を探してたら、部室にキミがいたってことなんだけどねっ」

そうか。それで滝はここ部室にやってきた。ドッキリでないにしても、これならつじつまが合う。というか、信じる、信じないという問題じゃないと言っているだろう、俺。

「それなら……とにかく、二人に会うことが先決じゃないのか？」

「そうだよっ。日も暮れそうだし、急いで菜々っ子の家に行くんだよっ!」

滝の一声で、俺達は喫茶部部室を駆けだした。

俺と滝が校舎から出たころには、すでに日は沈みかけており、上空にはうつすらと星空が広がり始めていた。長い長い一日の終わりを告げる夕日が、地平線に沈んでいこうとしていた。

「これから暗くなるから、気をつけてねっ！ 電気もないし、本当に真っ暗になると思うんだよっ」

「ああ、先を急ごう。保奈美の家はどっちなんだ？」

「こっちだよっ！」

滝が先導する。その滝の小さな背中も、二メートルも離れると見えなくなりそうなほど、あたりは闇に包まれ始めていた。

「……ん？」

ふと、空を見上げて俺は足を止める。

「ちょっと、どうしたのっ？ 急がなきゃいけないよっ！」

いや、それを見たらお前だって足が止まるさ。星座に詳しい奴なら特にな。

「滝。お前、星座は分かるか？」

「当たり前だよっ！ 星座は、魔術を扱う者にとっては基礎知識なんだよっ」

滝の子猫がじゃれるような騒がしい声を聞きながら、俺は後ろを振り返る。それを見て、俺は確信した。

「なあ、滝。今まで俺が走ってた方角は、北向きで間違いないよな？」

「そうだよっ！ 正門が東向きだから、一回左に曲がったってことは私たちは北に向かって走ってたってことだよっ！」

「そうだよな。それじゃ、あれは何座だ？」

俺は北の空を指さした。指さした先にあつたのは……。

「さそり座かなっ？ しかも鏡に写したみたいに反対になってるよっ」

そう。鏡に写したように左右が反対になったさそり座だった。

「さそり座って、南の方角に出る星座だよねっ？ どういうことだろうっ？」

「後ろにカシオペア座や北極星があるってことは、南北が入れ替わったって考えるのが自然だが……」

俺の言葉にびっくりして、滝は振り返る。

「そ、そんなっ！ 星座の位置を入れ替えるなんて、そんな魔術は聞いたことないよっ！ いやね、そもそもそんな大魔術があるなんて、考えられないよっ！」

「そんなもんなのか？」

「当たり前だよっ！ その上他の人たちが全員になくなっちゃうなんてっ……そんな大魔術をしようとしてたらねっ、まず私たちの誰かが気付くと思うんだよっ」

滝は見たことのないくらい慌てふためいていた。それは俺にこの状況がどうしようもないくらいに緊急事態で、世界が……魔法の一種によって作りかえられたんだと、一種の確信をもたらしてくれるような、そのくらいの慌てっぶりだった。

「……とにかく、俺たちは保奈美の家に向かったほうがいいんじゃないのか？」

「そ、そうだねっ！ 夜になって星の位置が変わったことも、二人に伝えなきゃっ！」

「そうだな」

俺が言うと、滝は再び北に向かって走り出した。

それから五分くらい走ったところに、保奈美の家はあった。滝が言うには魔法一家らしいが、そんな雰囲気は全くなく、俺の住んでるような普通の一軒家と見た目は変わらなかった。人がせっかくどこかの国の歩く城や、天空の城みたいなのを想像していたのに、見事に期待を裏切りやがる。

「ねねっ、ぼーっとしてないで、早く二人に会うんだよっ」

またいらんことを考えていたようだ。あたりはもうすっかり夜の闇に覆われていたが、この見た目普通の魔法力ラクリ屋敷からは、明りが洩れていた。本当に、どんなからくりを使ってやがる。

「あ、菜々つこっ!」

滝が玄関の前に立つと同時に、魔法屋敷から奈々子が出てきた。彼女の姿を見て感動する日が来るなんて、俺は思いもしなかったね。

「菜々子……よかった……」

「……はあ? きもっ……何泣いてんのよ」

「え?」

言われて気付いた。俺の目からあふれていた涙に。

「きつと安心したんだよっ! 朝からずっとひとりだったんだもんねっ!」

そうだ。俺は一人だった。朝起きたら、この世から人っ子一人残らずみんな消え去っていたんだ。俺は一日中走りまわって、誰かを探して、でも誰にも会えなかった。誰にも会えないと言うのがこんなに怖いことだとは思わなかった。それからやっと解放された気がして、安心から来た涙だったかもしれない。いや、違うな。きつと持つべきものは友達なんだ。こいつらがいるから、俺はここにいい。こいつらがいたから、俺は救われたんだ。きつと、別の誰か知らない人がいたとしても、おれはここまで安心できなかつただろ

うね。

「おい、バカ佑介」

「ああ？」

「ああ？ じゃないわよ。何ぼけーつとしてたのよ。早く上がりなさいよー」

「あ、ああ」

「あーあー、つてさ。あんたホントにバカになったんじゃないの？ お医者さんに頭見てもらったほうがいいんじゃないかしら」

「うっせ、余計な御世話だ」

菜々子に催促されて、俺は保奈美の自宅に入った。

## 006 (後書き)

お気に入り登録、評価ポイント入れてくださった方、ありがとうございます。  
ざいます。非常にやる気が出ました(笑)。

感想なども随時募集しております。

これからもゆるゆると更新していくので、よろしくお願いします。

それにしても、だ。

朝起きて、天涯孤独になって、超能力なるものを信じると言われ、それっぽいことをされて。今日のいう日はさすがに急展開なんて比較にならないほどの超展開だったと思う。しかし、今日という日はまだ終わっていないくて、俺はさらに衝撃的な光景を目にすることになったのだ。俺たちは菜々子の先導で魔法カラクリ賃貸住宅に入ったわけだが、そのリビングのフローリングに広がっていた光景と言ったら無かったね。

部屋の真ん中に何やら杖のようなものを持った保奈美が、その杖の先から伸びるレーザー光線、もっというならどこぞやの騎士さんが携帯しているような光の剣のようなもので、複雑怪奇な図形を描き散らかしている。部屋の電灯の下には光を照らす謎の球体が浮いており、床に目を落とすと、リビングいっぱい広がった円の中に、楕円やら正方形やら平行四辺形やら二等辺三角形やらをどんどん書き足していった。その一つ一つにアルファベットで何か言葉を記し込んでいた。そして、言葉を記し込んだ図形はその大きな円の中を所狭しと動き回る。もうタネも仕掛けもないと思っただね。魔法が存在しないと思うほうが気持ち悪くなるくらいだ。

「佑介。……やっぱり来たのね」

床いっぱい広がる円の中に正三角形を書き足しながら、保奈美は俺のほうを見て言った。

「本当にこんな形であなたに会うなんて、思いもしなかったわ」

相も変わらず冷淡な口調、おまけに無表情。しかし、喫茶部の部屋で話すときのような、何も考えずに携帯のディスプレイを見つめる彼女とは何かが違うと思う。何が違うかは分からん。むしろ、そんな日常からは全く違う世界に来た心地さえしているのだからな。

「あ、ああ。俺に言われて来たんだ。保奈美、何か分かったことはあるのか？俺たち、どうなっちまうんだよ」

「その質問には、あたしが答えるわ。保奈美ちゃんは、魔法陣の続きを書いて」

俺の肩に手を置いて、菜々子が背後から声をかける。

「あたしたちもね、朝この異変に気づいてぞっとしたわ。何が起ったか分からなかった。人間を人っ子一人消す魔法は存在しないはずだから。一人でやるには規模が大きすぎるし、だからってそんな大規模な魔法をやるうとすれば、連合が気付くわ」

そう話す菜々子に、いつものおちゃらけた雰囲気はない。その表情は真剣そのもので、やはりこの事態は緊急事態らしいというのを、改めて認識させられた。

「でも、現実に他の人たちがいなくなった。だからあたしは保奈美ちゃんの家を訪ねただけで、保奈美ちゃんにも何が起こっているのか分からなかったわ」

「だが……現にこうして何かやるうとしてるってことは、何が起ったか分かったってことだろ？こんな落書きが動くなんで、魔法的なことをやるうとしてるとしか思えんぞ」

俺はせかすように言ってしまった。切羽詰まっているのだ。

「まあその通りなんだけどね……夜になってやっと分かったわ」

「そうだよっ！ 星の位置がばらばらになってるんだよっ！」

場違いに元気な声がリビングに響く。しかしその小柄な少女の表情も真剣だ。

「そうよ、滝ちゃん。それだったの。あたしたちが見逃していたのは、まさにそれ。魔術じゃ星の位置は変えられない」

「そうだよねっ！ だからわけがわからないんだよっ、私は」

「だから、あたしたちはこう考えたの」

少し間を取って、菜々子が続けた。

「……あたしたちが、元いた世界にそっくりな世界に飛ばされた。人間四人を異世界に飛ばす魔術なら、それなりの……と言ってもかなりの腕だけど、そんな魔術師になら使えるはずよ。それに、予想通りあんたもこの世界に飛ばされてたしね」

「……ちょっと待ってくれ。この世界は俺たちのいた世界とは全く別の世界だとか、そんなパラレルワールド的なトンデモ世界までもが存在するって言うのか？」

もう何と言うか、常識の枠にとらわれるのはよそうと思っていた。悪い意味でな。だが、そんな発想を持っていたとしても、とても追

いつかないくらいに、それは俺にとってとはとんでもない発想だった。

「あるかないかで言われれば、あるわ。今そう言ったばっかじゃないの。あんた、やっぱり馬鹿？」

真剣な場面で真剣に馬鹿かと聞かれると腹が立つな。

「そういう意味で聞いたんじゃないよ。というか、さっきからよく分からん単語も出てくるし、いまいちよく分からねえんだよ。それに、予想通り俺がここに来たってどういうことだ？」

魔術について。魔法陣を書くという行為。それをせずに千里眼を使った滝。そして魔法連合と言う組織。俺には知らないことが多い。これだけ普通に話されると、あの無名な高等学校の授業で教わったのだろうか？と疑問に思いたいくらいだ。そして、なぜ俺がここにいるのかも、滝以外のこの二人は知っている雰囲気だ。

「魔法連合」

その問いに答えたのは、今にも夜の闇に消え入りそうな保奈美の声だ。と言っても、天井に光る謎の球体のおかげで、部屋はそれなりに明るいのだな。

「保奈美ちゃん。魔法陣は書き終わったの？」

「うん。あとは、唱えるだけ」

菜々子の問いかけに保奈美は小さくうなずいた。

「えっと、いったい何をするのっ？」

「死者を蘇らせる」

「そうなんだっ！ ほなみん、がんばっ！」

そして魔法と言うのは全く何でもありのトンデモ世界らしいというのは、この会話を聞いて俺が確信したことだ。がんばって死人が蘇るなら、この世界はとっくにゾンビだらけの世界になっているだろうよ。いや、俺たちが元いた世界は、と言ったほうが正しいのか。

「話を戻す。魔法連合のこと。そして、あなた自身のことよ」

主張のない声で、保奈美は続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8875x/>

---

北高喫茶部の非日常

2011年11月8日05時32分発行